生きものの行方

生きものの行方

圓地文子

新潮社

© 1967 F. Enchi Printed in Japan

生きものの行方

昭和四二年七月五日印刷
昭和四二年七月十日發行
著者・圓地文子
發行者・佐藤亮一
發行所・株式會社新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話・東京二六〇局一一一一
振替・東京八〇八
二光印刷
新宿加藤製本
定價四九〇圓

落丁、亂丁本はお取替へします

目

次

生きものの行方　7
土地の行方　71
墨繪牡丹　109
幻の島　133
心中の話　157
京洛二日　175

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

雪の大原　201
土蔵の中　217
初釜　233
冬の死　245
美しい姉妹の話　261

題字　金子鷗亭

生きものの行方

生きものの行方

小説の原稿を書上げて終りの部分に手を入れ終ると、鵜崎梶子は、かさばつた原稿紙を二つ折りにして、裏にそれを受取りに來る雜誌社の名を書き込み、片手に持つて、二階の梯子段を降りながら、

「御苦勞さま、御苦勞さま」

と聲に出して言つた。

家内には娘に幼い孫、それに手傳ひも二人ゐるが、皆、梶子が原稿を書きに書齋に坐り込んでゐる事實を呑みこんでゐるだけで、どんな種類の仕事に身を入れてゐるか、氣をぬいてゐるかなど誰も注意してはゐない。骨の折れる仕事が一片ついた時の解放感を、梶子はさういふ言葉で表現し、自分を犒ふことに、滑稽で眞劍な滿足を味はふのが常であつた。

下座敷の長椅子に身體を轉ばして、何度も強くまばたいたり、瞼の上や周圍をぐりぐり指先きで揉んでみたりしてゐる内に、眼の疲れが少しづつほぐれて來、それと一緒に首を前後左右に動

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

かしてみたり、手首を亂暴に搖つて見たり、氣がふれたのではないかと思はれるやうな奇妙な運動をしばらく繰返した。

ことことと小さい足音が部屋の外でとまつたと思ふと、引き扉を細めに開ける氣配がする。上の孫の和子が來たのだなと察して、

「カズ」

と呼ぶと、その拍手にするりと扉をぬけて、赤いスエータの女の子が近づいて來た。

「お祖母ちやま、お仕事すんだの」

「うん、すんだよ」

この子は多分キャンディかガムをねだりに來たのだ。孫の仕つけなど梶子には出來ない。廊下傳ひの隣家から時構はず乘込んで來られると、食物をやつて少しの間相手になつてやるだけである。菓子のあるガラス戸棚の方へ手をのばさうかと思つてゐると、

「お祖母ちやま、これなに？　ジロ君の首輪？」

と言つて和子は手に持つてゐた赤い皮の輪を梶子の眼の前で振つて見せた。ジロオといふのはつい最近まで家にゐて、行方知れずになつたシャム猫の名である。

「ジロオの首輪……さうぢやないでせう。ちよつと見せて」

梶子は和子の手からその小さい首輪を受取つて眺めた。赤い染革の一部分に長方形に金具がは

め込んであつて、そこに、「鵜崎家飼猫、又五郎」と仔細らしく彫りつけてあつた。それを買つた淺草仲見世の犬の首輪專門の店も、そこでこの名前を彫つて貰つた十數年前のある日の午後の曇り日だつたことまで、鮮やかに梶子の記憶に浮び上つて來た。

「あら、これ、又五郎の首輪ぢやないの……まあ、こんなものがどこにあつたの」

「又五郎つてなあに？」

和子は不思議さうに訊いた。又五郎がこの家に飼はれてゐた時代には和子はまだこの世に生をうけてゐなかつたのだ。

「又五郎つていふのはね、もうずうつと前におうちにゐた猫なのよ。とつても利口で、カズの曾祖母ちやまが可愛がつていらしつたの」

「ジロ君より利口だつた？」

「うん、利口なことはジロ君よりずつと利口だつたわね。ジロ君の方が綺麗ではあつたけどね」

「その猫どうしたの？　どうしておうちにゐないの」

和子は赤い首輪を祖母の手から取りかへして珍しさうにあちこち見ながらきいた。歳月の感覺はまだ和子の智惠では處理しきれないのである。

「ゐなくなつてしまつたの……そのあとどうなつたかわからないわ」

「ぢやあジロ君と同じね……どうして、ゐなくなるんだらうなア」

和子は不思議さを誇張した眼の見張り方で言つた。
「ほんたうにどうしてゐなくなるんだらうね」
梶子は幼い孫の訝しむ眼から暗示を授けられたやうに自分も驚いて言つた。ジロオや又五郎だけではない、まだまだいくつかの飼犬や飼猫の記憶が突然によきによき頭をもたげ、芳しい食物の匂ひを求めるやうによりこぞつて來て梶子を壓倒した。
「この首輪どこにあつたの？」
と梶子はもう一度訊いた。
五歳になつたばかりの和子の言葉からは一貫した首尾は求めにくかつたが、補修してみると、煖房用の電氣機具など物置きから女中が出してゐる時に、そこにあつた不用品の箱を子供たちが面白がつてかき交ぜ、その中からこの小さい赤い首輪をつまみ上げたといふ經緯であるらしかつた。
「又五郎といふ猫ははじめうちの猫ではなかつたのよ。それがどうしてうちの猫になつたか、話して上げようか」
梶子は孫の手から又赤い首輪をとり戻しうちかへして見ながら言つた。この首輪は牡猫の又五郎がいくら布の首輪をして置いても、さかりの時といふと戸外を飛歩き、必ず落して來るのを、梶子の母が氣にして、首から振り落さないやうに……二つには迷ひ猫になつても身元の分るやう

にと犬なみに氣を配つて名を彫らせたものであつたが、いざさせてみると猫は首の當りの固いのを厭がつて、前足を上げては取りたがつた。母はそれを見ると、猫のうるさがるのが可哀さうになつて、折角作つたのに又外して、別の縮緬に軟かく綿を含ませたのに取替へてゐた。

又五郎は全身黑がかつた虎斑に長いすんなりした尾を持つてゐたが、灰色と茶と黑の交つた毛色には、眞紅や桃色、淺黃色などのはなやかな縮緬のちんころがけはいかにも映りが惡かつた。それでも梶子の母は色々な小裂れを選み出して來ては老眼鏡をかけてせつせと又五郎の首輪を縫つてやつた。正月の前になると、

「又にもお正月がけをこしらへてやらなければ」

と言つて、お地藏さんの涎かけのやうに襞をとつた緣の特製首輪を作つてやつた。赤や紫の襞のある「お地藏さん」を首に卷いた又五郎の正月の晴れ姿は一層顏と似合はないで、皆に笑はれたが、梶子の母は自分もをかしさうに笑ひながら、次の年も又五郎の爲に新しいお地藏さんをつくる手業をやめなかつた。あの頃母は七十を半ば以上すぎてゐた筈であるが、又五郎の首輪を飽きずにいくつでも作つてゐる時、彼女の內には少女の童心が甦つてゐたのかも知れない。

「又五郎は火事があつた爲におうちの猫になつたのよ」

と梶子は言つた。

「火事ってお家が燃えるんでしよ。どこで火事があつたの？」

と和子はきいた。

火事を出した家は、梶子の家から、横町一つ隔てた近い町角だつたが、しばらく空地になつてゐたあとで、近所の風呂屋が買つて可成り長い間材木置場にして置いた。現在ではアパートが建ち、階下は貸しガレージになつてゐるから、そこだと説明しても、和子には火事場の實感とは無縁であらう。

「カズが幼稚園へ行く時、通りへ出るでしよ。あそこの右角のアパートのあるところが、昔は普通のお家だつたの……そこに又五郎ははじめ飼はれてゐたの」

「思出せばおお、それよ」と歌舞伎の舞臺なら物語りの乘り地になるところだと思ひながら梶子は五歳の孫相手に十數年前の火事の話をはじめた。こんな風にして自分も幼女のころ母や祖母の口からよく自分の生れない前にあつたエクサイティングな事實について聞かされたものだと思つてみたが、その頃の民間傳承にはもつと、爐端めいた和氣藹々とした雰圍氣が釀されてゐたことを梶子の記憶は心身に溜めてゐた。

又五郎といふ名を彼はその頃主人から貰つてはゐなかつた。主人の家には別の呼び名があつた筈である。小猫の時どこからか貰はれて來たに違ひないが、餘り愛されてゐる猫ではなかつた。その家は商家で別に店を持つてゐたが、主人は道樂をするし、妻の方にも愛人があつたらしく、

二人とも始終外出勝ちで、小學校へ通ふ子供たちとまだ少女期の女中だけが留守をしてゐることが多かつた。恐らく女中が猫を嫌つてゐたものであらう。又五郎は食物を貰はないことも多いらしく、うそうそ外を歩きまはり、他人の足にまとひつく習慣を持つやうになつた。

梶子の家の女中の宮子がなつかれて、つい抱上げ、連れて來たのが、そもそも家に來た最初であつた。まだ生れて二三ケ月ぐらゐの小猫であつた。狸のやうに茶ぐろい小さい顏に、眼だけが金色に美しく張り裂けてゐて、聲が綺麗に澄んでゐた。

その頃まだ高校生だつた娘の南枝も梶子自身も猫好きなので、

「可愛いわね」

「色は黑いけど、眼がいいぢやないの」

「歌舞伎の又五郎の眼に似てゐるわ」

などと言つて、替り替り抱取つて、小猫特有の毛並みや骨組みの柔軟な感觸を娛しんだが、梶子たちがさうするのを見てゐて、警戒するやうに、

「いけませんよ。猫は抱くと直き馴ついて入つて來るから、早く返しておしまひなさい」

と言ひ、のぞき込んだだけで決して手を出さうとしなかつたのは梶子の母の園子であつた。

園子は住んでゐる家内も身の周圍もいつもきちんと整へて置かなければ氣のすまない潔癖を老年まで持ちつづけてゐた。猫が嫌ひといふよりも、座敷を泥足で歩いたり、柱で爪を磨いだりさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.